



本町三丁目

7. 18水害から

今年で70年目を迎えます

今から70年前の昭和28年7月18日、和歌山県中部を中心に未曾有の大災害「7・18水害（昭和28年大水害）」が発生しました。御坊市でも死者・行方不明約220人の甚大な被害が出ました。

災害発生から70年が経過し、当時を知る人が少なくなってきた中、災害を経験した2人の方にお話を聞くことができました。



田淵 達男さん
(上野口)

当

時の事は今でも鮮明に覚えています。梅雨の末期で、1か月ほど雨が降り続いているような状況でしたが、昭和28年7月17日の上野口の天気はくもりで雨は降っておらず、川の水かさは少なく水もきれいでした。

次の日の朝、河川が増水してきているという話を聞きましたが、父親と「今まで大丈夫だったから今回も大丈夫だろう」と高をくくっていました。そんな中、近所の人が「日高川の水位が上がってきているぞ！今すぐ逃げろ！」と叫んでいる声を聞き、家の前に出たところで、今の防災センター近

くの堤防が決壊し、泥水があふれてきましたのです。

私は一心不乱に農業用の牛を引っ張って、前にあるとび山をかけあげり、熊野まで逃げて助かりました。

幸いにも家族や近所の方もみんな逃げることができたのは、勇気を出して声を出してくれた人がいたからだと思っています。

発災後の生活については、次の日から2・3か月間、家に溜まった泥出しと家の片付けをする毎日でした。家で寝れる様になるまで、避難した熊野の家に泊まらせてもらったことや、地域の人みんなで協力して片付けをしたことなど、人の優しさや温かさ助けられたことは忘れることはできません。

いざというときに協力ができたのは、日頃から地域での付き合いが盛んで、何かあったら助け合える関係性が出来ていたことが一番の要因だと思っ